

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 30 日現在

機関番号：32618
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2013～2016
 課題番号：25370229
 研究課題名(和文) 柳亭種彦の総合的な研究 種彦の吉原研究を中心に

研究課題名(英文) General study of Ryutei Tanehiko

研究代表者

佐藤 悟 (Sato, Satoru)

実践女子大学・文学部・教授

研究者番号：50178729

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：種彦の『好色本目録』『吉原書籍目録』の本文校訂を行うかたわら、『還魂紙料』を中心にそれらの書目の引用状況の検討を行なった。これらの作業を通じて、上方の文学作品が江戸の吉原を描く時の定型的表現の系譜について示唆を与える材料が見つかった。また従来知られていなかった『吉原一切鏡』についての知見を得ることができた。

『鱸包丁青砥切味』の刊行と葛飾北斎らが関わる狂歌グループとの関係を明らかにした。種彦の合巻作品と大津絵の関係の検証をおこなった。『御詠染遠山鹿子』口絵からこの当時流行の「大津絵節」のテキストを復元することができた。

研究成果の概要(英文)：While revising manuscripts of catalogues “Koshokuhon mokuroku” and “Yoshiwara shojyaku mokuroku” written by Tanehiko we carried out a research on quotations from these catalogues, with special focus on “Kangonshiryō”. Through this research we were able to discover materials, which will help to illuminate the genealogy of formal expressions used in literary works in Kamigata area when describing the pleasure district of Yoshiwara in Edo. We were also able to acquire new knowledge about “Yoshiwara itsusaikagami”. We have elucidated the relation between the publishing of “Suzukiboucho aoto no kireaji” and a literary group of authors of kyōka, Katsushika Hokusai and others were involved with. We explored the relations between Tanehiko’s works and Otsu-e paintings. From the frontispiece of “Otsuraezome-Toyamaganoko” we were able to restore the text of “Otsu-e bushi”, which was quite popular at that time.

研究分野：日本近世文学

キーワード：柳亭種彦 好色本目録 吉原書籍目録 吉原一切鏡 大津絵 鱸包丁青砥切味 御詠染遠山鹿子 子ども

1. 研究開始当初の背景

柳亭種彦は19世紀前半を代表する戯作者であり、その作品は読本、合巻、人情本、洒落本、考証随筆と多岐にわたる。読本においては、曲亭馬琴との競争に敗れた一群の読本作者の一人というイメージが形成されている。また読本で成功できなかったため、合巻に転進して作者として名を成したというイメージもある。

これらのイメージが形成、定着したのは江戸後期の文学史が、馬琴が残した『近世物之本江戸作者部類』やその日記、書簡、評論などによって、馬琴を中心とした文学史が最初に成立したことによる。馬琴という卓越した作者が残した文学関係資料が、研究上、第一級資料であることは言うまでもないことである。しかし資料批判をおこなわずにその記述を盲信することは、多くの危険を孕んでいるにも関わらず、それを無視して研究が進められてきた。馬琴は読本を江戸戯作の王者と位置づけ、合巻をそれよりも劣る、潤筆料のための作品と位置付けていた。上田秋成『雨月物語』に代表される上方の前期読本と曲亭馬琴『南総里見八犬伝』などに代表される江戸の後期読本という文学史の流れを肯定するならば、それを貫くものは中国小説の撰取であり、正しい評価といえる。しかし山東京伝や式亭三馬、種彦らの読本はそれとは異なる先行の歌舞伎や浄瑠璃、浮世草子などの撰取によって書かれているものが多く、再検討を要する。また読本と合巻の関係も中国小説の撰取ということを除けば、作品としての上下関係を認めることはできない。したがって京伝、種彦の研究は近世文学史を構築する上で不可欠といえることができる。

合巻史を構想すれば、近代文学への系譜としては、山東京伝 柳亭種彦 柳下亭種員 仮名垣魯文という流れを想定することができる。近世文学から近代文学への移行という問題を考える時、種彦の研究は馬琴、京伝と並んで重要という背景がある。

2. 研究の目的

1. の背景で記したように、近世文学史の再構築を行うためには、山東京伝や柳亭種彦の研究を通じ、馬琴の残した史料に対して批判していくことが必要であることはいうまでもない。そのため、本研究では、柳亭種彦の総合的な研究の基礎としての年譜の作成を行う。そのためには種彦の読本、合巻、考証随筆作品について、版元、挿絵画工の問題等、種々の研究を行う必要がある。特に種彦の作品は17世紀及び18世紀前半の吉原研究を踏まえていることが多い。と共に、吉原の研究をする必要がある。ただ同時代に刊行された吉原細見の序文を山東京伝、式亭三馬、十返舎一九らが執筆しているのに対し、種彦の序文は一つもない。これらの事実を踏まえながら、種彦の吉原研究を明らかにしていく。

3. 研究の方法

(1) 柳亭種彦の研究を行う上で基礎となる年譜の作成を継続した。その方法は以下の通りである。

『好色本目録』『吉原書籍目録』に記載されている書籍の調査、及び両目録の本文校訂、注記を行う。識語等の調査により、種彦の活動を浮かび上がらせることが可能となる。

上記以外の種彦旧蔵書の調査を行う。

調査にあたっては種彦の蔵書目録などで所蔵が確認できた蔵書について、パリ国立図書館、大英図書館、国立国会図書館等の所蔵機関、及び個人所有の調査において調査確認し、識語等を収集し、種彦の作品への影響等を研究する。

③ 日本浮世絵博物館、パリ国立図書館等を中心とする国内外の博物館、美術館、図書館、個人所蔵の浮世絵調査を行い、種彦と浮世絵、版元の間接関係を探るといった手法を用いる。

(2) 柳亭種彦の主要な作品である読本と合巻の関連調査を行う。特に社会情勢(政治、宗教、経済、災害等)との関連に留意する。

(3) 柳亭種彦の重要な活動領域である考証随筆、特に『還魂紙料』の研究を行う。山東京伝、喜多村信節らの考証随筆との関連に特に留意する。

4. 研究成果

(1) においては、本文の校訂作業を行った。その過程で、従来その存在が不確かであった『吉原一切鏡』全五巻を発見することができた。石川流宣が関与した最初の吉原細見ということができる。これについては所蔵者と協議の上、発表を行う予定である。

(1) については(3)の研究との関連で新知見を得ることができた。

(1)③浮世絵の調査研究は公的機関からは新たな資料の発見はなかったが、業者から二点の新出資料を購入することができた。

その一点「七変化女眼鬘」は種彦の門人、笠亭仙果の作成した種彦の著作目録には記載されているものの、明治以降は全く知られていないもので、『浮世絵芸術』168号に報告を行った。この作品は浮世絵ではあるが、おもちゃ絵としての性格が非常に強い作品で、種彦の戯作者としての活動に新たな視点を加えることができた。他の一点は「ほん雨を棧敷から見ると松を太夫と名づけそめけん 種彦」という画賛のある歌川国貞画の浮世絵作品「讀老松考」(西村屋と八板)を発見した。この作品は村田了阿の『老松考』(文政元年十一月刊、伊賀屋勘右衛門板)の出版を祝して出されたもので、了阿と種彦の関係、伊賀屋と西村屋の関係を知らうえで重要な作品といえる。種彦の合巻作品『三虫博覧』(文政二年刊)の刊行にも関わるものである。

これについても近日中に公表予定である。

またこれらの調査、研究過程で、あらたに三代目歌川豊国画「誂織弁慶好」、歌川国芳「夏けしき花の縁日」を見出した。これらも「見立て」「やつし」の研究に重要なものなので、『浮世絵芸術』169号、170号において報告した。

浮世絵の調査を通じてさらに富士講と種彦の関連の調査を行った。天保二年刊『富士裾うかれの蝶衛』が富士講中興の行者、身禄の百回忌による富士信仰の高まりを踏まえて執筆されたこと、葛飾北斎「富岳三十六景」や二代目歌川豊国「名勝八景」の出版も同様の現象であることを明らかにし、第18回国際浮世絵学会秋季大会において発表を行った。合わせて柳川一蝶斎の「うかれの蝶」工業との関係も明らかになった。

(2)については「十九世紀江戸文学における作者と絵師、版元の関係」において、種彦の合巻処女作『鱸包丁青砥切味』(文化八年刊)は蘭斎北嵩が版元西村屋与八に仲介することによって刊行されたこと、同年に刊行された『勢田橋竜女本地』が種彦の狂歌仲間の壺龍が絡んでいることから、種彦の文芸活動が北斎を中心とした狂歌グループとの関係から派生したことを明らかにした。

「近世挿絵史の構築をめぐる諸問題」は近世文学から近代文学への移行の問題を、挿絵史の視点から捉えたものである。絵入本ワークショップにおける諸発表を踏まえて、種彦を中心に行われた。

このほかルーベン大学(ベルギー)の調査によって『正本製』(文化十二年～天保二年刊)の袋を見出すことができた。後摺の袋ではあるが、これにより曲亭馬琴『傾城水滸伝』初編(文政八年刊)刊行の影響を確認することができた。

(3)については「大津絵」と「子ども」に関する二つの研究を行った。

「大津絵」の研究は山東京伝、喜多村信節らの考証随筆に留意しつつ、大津絵の研究を行った。その結果、種彦の大津絵研究は京伝の研究を踏襲するものであること、同時代の式亭三馬とは異なる大津絵受容を行ったこと、『女模様稲妻染』(文化十三年刊)が考証随筆の流行を踏まえながらも、その成果を完全に吸収できなかったこと、『誂染遠山鹿子』(天保元年～天保七年刊)では考証随筆の成果を十分に踏まえていることを明らかにした。また『御誂染遠山鹿子』は「大津絵節」の原型を伝える資料としての価値もあることを明らかにした。これらの成果は国際シンポジウム「江戸の庶民絵画、大津絵を読み解く 街道絵師からミロまで」において「江戸文学のなかの大津絵」として発表され、『美術フォーラム21』35号(2017年11月刊行予定)において活字化される予定である。

「子ども」については「子ども絵・子ども絵

本 - 破邪と予祝」として発表した。同論文は『還魂紙料』に用いらた資料等を使用しながら、子どもを扱った浮世絵、双六、絵本等についての考察を行ったものである。

『還魂紙料』に引用された吉原に関する作品が、先行する作品を多く剽窃していることを見出した。これは吉原研究にこれらの文献を使用する際には史料批判の必要があることが判明した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4件)

佐藤悟、「子ども絵・子ども絵本 - 破邪と予祝」、『美術フォーラム21』、査読有、34号、1-10頁、2016年

佐藤悟、「歌川国芳「夏けしき花の縁日」」、『浮世絵芸術』、査読有、170号、42-51頁、2015年

佐藤悟、「三代目歌川豊国画「誂織弁慶好」について」、『浮世絵芸術』、査読有、169号、45-53頁、2015年

佐藤悟、「柳亭種彦「七変化女眼鬢」影印と翻刻、解題」、『浮世絵芸術』、査読有、168号、53-59頁、2014年

〔学会発表〕(計 3件)

佐藤悟、「江戸文学のなかの大津絵」、国際シンポジウム「江戸の庶民絵画、大津絵を読み解く 街道絵師からミロまで」、2016年7月09日、日仏会館(東京都渋谷区)

佐藤悟、「近世挿絵史の構築をめぐる諸問題」、絵入り本ワークショップ、2014年12月21日、同志社大学(京都府京都市)

佐藤悟、「富士講と浮世絵」第18回国際浮世絵学会秋季大会、2013年11月17日、学習院大学(東京都豊島区)

〔図書〕(計 1件)

佐藤悟、勉強出版、『古典文学の常識を疑う』(松田浩・上原作和・佐谷眞木人、佐伯孝弘編)2017年、240頁(「十九世紀江戸文学における作者と絵師、版元の関係」、査読有、196-199頁)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 悟 (SATO, Satoru)
実践女子大学・文学部・教授
研究者番号：50178729

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()